

青花 瓦版

せいかわらばん

2009年4月25日発行 通巻第105号
発行 佐賀県 西松浦郡 有田町 黒牟田 しん窯青花
電話 0955-43-2215 FAX 0955-43-2889
URL <http://shingama.com/shingama.html>
E-Mail Address shingama@po.saganet.ne.jp
発行責任者 梶原茂弘

— 第百五号 — (2009年春号)

橋口博之（青花匠）展 in 日本橋三越本店

今回で7回目、東京で10回目の個展でした。百貨店の食器売場を見学するたびに特選食器では、柿右エ門窯、今右エ門窯、源右エ門窯、香蘭社、深川ブランドだけ並べてあります。その他は殆んど見当たりません。そして、世界の洋食器ブランドが勢揃いです。スポットライトも多く光り輝いています。

いつもなぜ有田ブランドが世界ブランドの中でも傑出していたのに売り場では狭いコーナーになってしまったのだろうと首をかしげてばかりでした。自分達の城は自分達で守ろうと強い信念を持って、高品質な食器をコーナー展開したいと願っていました。苦節10年、いや業界に入ってから苦節42年。橋口博之がしん窯の代表として顔として日本橋で個展を展開してきました。そして今年ためしに特選コーナーに置いてみようという夢のようなお話を戴きました。小躍りしましたが、今後お客様から支持され、コーナーを維持、運営していく厳しさに直面します。これからがほんとうの有田としての真価やしん窯としての商品力を問われるのです。一瞬の嬉しさを忘れてすでに心はお客様の一挙手一投足を見つめ、喜んで頂く為のモノづくりへ動いています。ひとりでも多くのお客様が特選和食器売場へ足を運んで下さる事を切に願っております。ありがとうございました。



ご来場ありがとうございました（写真は今年の展示会より）

春の陶器市

山笑う頃になりました。毎年市前になるとワクワク、ドキドキの落ち着かない気持ちになります。今から半世紀前の話ですが、期間中、下校時は有田駅付近から上有田駅付近まで市のお祭り気分にかかれて、あっちこっち寄り道をしながら歩きながら楽しんでいました。両親が赤絵町の今右エ門邸の軒先を借りて、半端物を並べて売っていましたが、12代の今右エ門のおじさんから「しん窯ももう少しよかとば作らんば。」とか「蓋物は難しかばい。一品物ば作った方がよか。」などと適切な助言を与えて下さっていました。私は小学生の頃でしたが、子供心に「いいやきものを作らなければ。」と心にやきついておりました。その後、明治期に国をあげて出品した万博作品に参画した窯のひとつであったという史実を知るにつれて「後世にのこるやきものをつくらなければ。」と気づかされた次第です。昭和42年に有田に帰り父の手伝いをしてから早42年。父の理解をえて私達の思いを器にたくそうと一念発起して「青花」ブランドを発表して早33年。有田の財産である職人匠集団を育てる事を天職にして有田の知名度をはかり「青花」ブランドを育ててきましたが、有田という伝統産業の凋落ぶりは目を覆うばかりです。市場の声を形に出来なかった組織のもろさを露呈し反省する事しきりです。

さて、DMのスタイルも一新しこれまでご支援して下さいましたお客様の顔を思い出しながら投函しています。今年は「青花」のブランドイメージの強い文様をプリントして、おしゃれバッグやエプロンを初めて製作してみました。お客様の反応が楽しみです。また、創業期の青花シリーズの商品と共に当時ハイカラだと評価の高かったカタログなども並べています。30数年前をご存知のお客様にとってはとてもなつかしいコーナーだと思います。市のおもてなしは何ととっても市価より安い蔵ざらえ商品です。そしてもうひとつ忘れてならないのが、春と秋の新作展です。職人でありデザイナーの皆が、新商品こそが最大のおもてなしであると自信と誇りをもって、新作展に挑んでいます。お客様に毎年2回新商品に触れて戴く事も楽しみのひとつかなあとと思います。行楽を兼ねてお誘い合わせのうえ、ご来場下さい。



タジン鍋売れています。

私の親戚の東洋セラミックス久野社長が開発したタジン鍋が大好評です。縁あって私達も青花のブランドイメージを彷彿とさせる絵柄を6種類出しました。一人用から家族用（3～5人前）も用意したいと思います。一人暮らしやヘルシー志向のお客様にも簡便な直火用（IH用ではありません。）鍋として重宝して戴いています。



唐草帆船



洵濃帆船



二人異人と帆船

友 遠方より来る

早稲田の同期生加藤匡紀君から突然電話がありました。46年ぶりでしょうか。別府の立命館ATU大学教授として昨年9月赴任してきたそうです。数日経ってキューバ人夫妻とインドネシア人の生徒を伴って有田探訪を計画してくれました。加藤君は体育会系のゴルフ部キャプテンとして学業とスポーツを両立させ、実りある学生生活を謳歌したみたいです。応用化学の分析は4人1組で、大林君（日立ハイテク社長）、加藤君、川崎君そして私が同じグループで机を共有していたような記憶があります。加藤君は外資系の日本会社社長を経て、得意の英語と経営者としての経験を生かし、創立7年目になる国際大学へ招かれたようです。若い外国の生徒達と毎日交流があって刺激があり、同級生とは思えない程若々しかったです。奥さんはシャンソンのプロの歌手で今も現役だそうです。46年の空白も何のその。すっかりキャンパスに戻ったようにはしゃいで花が咲きました。生徒達も日本語も堪能で、自国のキューバやインドネシアと日本の架け橋になる仕事をしたいと目を輝かせていました。日帰りの予定だったので濃密な有田探訪でしたが、龍門の鯉に舌鼓を打ちながら時の流れを忘れて、親愛なる友と語り合っ、すばらしい時空間を共有しました。

近代の黒牟田山窯場情景

第10期陶芸教室閉校式に九州陶磁文化館副館長鈴田由紀夫先生に「近代の黒牟田山窯場情景」と題して卓話をして戴きました。私達が住んでいる有田の西北に位置する黒牟田山、応法山は有田皿山10区7山のひとつであり、鍋島藩の基幹産業であった有田焼生産地の中心として支えていました。今でも黒牟田新窯窯跡、多々良の元窯窯跡、多々良2号窯窯跡、山辺田窯窯跡、窯の谷窯窯跡、弥源次窯窯跡、掛の谷窯窯跡と貴重な遺跡が点在して残っています。有田川界限にやきものと農業を業にして生活をしてきた往時の職人さん達の暮らしを垣間見る事があります。その黒牟田に住んで64年、学生時代の東京生活4年間をのぞいて有田の歴史と共にやきものと共に時代のつなぎ役としてその責務を負っています。

しん窯の二代目梶原菊三郎、三代目友太郎は明治18（1885）年、五品共進会において染付山水4尺鉢を出品し受賞した大作を上野博物館へ献納（代価250円）した事実があると話して下さいました。数年前の名古屋万博の時、万博美術展で見た4尺鉢を前にして立ちすくんだ事を思い出しました。そして後日、日経新聞の文化欄で鮮烈なジャポニズム10選として日本画家の平松礼二先生から絶賛を戴き興奮した事も昨日の事のように。私達も後世の人に感動を与えるようなモノづくりを続けなければと改めて自分自身を奮いたたせた次第です。鈴田先生ありがとうございました。



今年もつつじの花が見事です
(4月中旬撮影)

職人さんのひとりごと

～第19回・筒井さち子さん～

最近、亡父の4枚のふすま絵を思い出す時がある。一面の蓮池の中に、鯉がにらんでいた。窯業試験場で働いていた父は、家業のために勤めをやめた事は知っている。私にも「有工のデザイン科に行かんか」と言った事もある。2人で何か話し込んだ記憶もないのにどこをどう巡ったか、今有田の窯元で描き筆を握っている私を見たら、父は何と言うだろうか、という思いがある。亡くなった父の年齢になったというのも関係しているのだろうか？

